

【研究ノート】

## 師授伝統からなる博物館学意識

### —動物学者の思想を中心に—

The Traditional Museology Succeeding from a Master to Apprentices

— A Study on Especially Zoologist's Thought —

下湯 直樹\*

Naoki SHIMOYU

#### 1 はじめに

我が国の博物館学は、「棚橋学」と揶揄されるように、明治から昭和に至るまで活躍した棚橋源太郎の博物館学意識を基礎として今日に至っている。また、その棚橋が遺した博物館学の業績もこれまで往々にして語られ、今なお論究の対象とされている。しかし、1986年、まずもって邊見端が本誌において明治の博物館学者、坪井正五郎の博物館学の業績を発掘、著述した際に「我々が現在の博物館を考える時、このような先人の業績を等閑にしては、その根本を見失いかねない。」(邊見端1986 p29)と一部の先人の業績のみを扱うことへの警鐘を鳴らした。その後、伊藤寿郎が長年収集してきた博物館学の文献を伊藤自らが提供し(君塚仁彦 1991)、全21巻と別巻で構成された『博物館基本文献集』が纏められたことにより、博物館学の基礎となる、博物館が組織的な取り組みを開始した1920年代末から戦後に至るまでの学史が我々の知るところとなった。伊藤も刊行にあたって「歴史の空白を埋める道標となることを確信している」(伊藤寿郎 1991)と述べている通り、この文献集が我々の博物館学研究において「道標」となり、我々に多大な影響を与えている。

しかし、伊藤がそうしたように博物館学の大系化を第一に考えた場合、未だ博物館が組織的な取り組みを開始する以前、博物館の黎明期にあたる明治、大正期の博物館学に関する文献の集積は不十分であるということは否定しうることの出来ない事実である。そこで、本稿ではその文献の集積の一端となるべく、あえて人文系研究者の立場から明治から大正期を代表する自然系、特に動物学の先人、箕作佳吉、谷津直秀、川村多実二に着目し、その文献の提示と博物館学的な知見の整理をするとともに再評価していきたい。

これまで、川村や谷津に関しては博物館学史の中で取り上げられることは殆どなかったが、こ

\* 國學院大學博物館学研究室 助手 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 AMC A101

と箕作佳吉に関しては、これまで学史上、取り上げられることがままあった。中でも椎名仙卓は、箕作の博物館学意識について早くから気付き、1978年の『博物館研究』に「明治後半期に於ける博物館設置・運営論－田中芳男・箕作佳吉・棚橋源太郎－」と題した論文を載せ、田中や棚橋と同列に箕作の博物館学意識を評価している。また、箕作佳吉の孫弟子で、川村多実二の弟子であった博物学史の大家である上野益三は『博物学者列伝』の中で「箕作先生は東京大学の初代教授として、三十人をこえる動物学者を育てた。箕作先生の教えを受けた川村先生は、同じく三十人あまりの動物学者を育て、そして、日本に動物生態学を創始した。その影響力の大きさから見て、川村先生という個人の創造的な仕事の重みを感じずにはいられない。私は、川村先生という個人にめぐり合い、師と仰ぐことができた幸運をよろこびとし、誇りとしている」（上野益三1991 p212）と語るように、いずれの人物も多大な影響力を持った教育者であり、脈々と学問的な師授伝統がそこには存在していた。

そこでまず、その遡源とも言うべき箕作佳吉の略歴及び専門の動物学の業績に触れ、改めて氏の博物館学意識を探る。その上でこれまで語られることが少なかったその弟子の谷津直秀や川村多実二の博物館学意識について順を追って迫りたい。

## 2 箕作佳吉（1858～1909）

### 2-1 略歴



写真1 箕作佳吉  
※玉木存1998より転載

箕作佳吉は、1858年1月15日（安政4年12月1日）、著名な蘭学者の箕作阮甫を祖父に持ち、津山藩（岡山県）の藩医で後に明六社の主要メンバーとなる箕作秋坪の三男として生まれる。兄に物理学者の菊池大麓、弟に歴史学者の箕作元八、義弟に人類学者の坪井正五郎、甥に物理学者の長岡半太郎をもつ。箕作佳吉は漢学を幕府の奥医師緒方洪庵に学び、洪庵没後はその子である緒方惟準の下で保田東偕に学んでいる。さらに明治初年には父秋坪の三叉学舎で洋学を修め、1871（明治4）年に慶應義塾で英学を学んだ後、1872年には大学南校に入学した。そして、南校のアメリカ人教師ハウスの官舎に寄宿していたのであるが、このハウスの勧めでアメリカに渡ることとなる。留学中はコネチカット州ハートフォードの普通学校に学び、その後、一旦トロイのレンサラー工科大学

に入るも、目が悪くなったため、土木工学から動物学に転じて、ニューヘブンのエール大学に入学し、1879年に卒業、バッチェラー・オブ・フィロソフィーの学位を受ける。さらにノースカロライナ州のチェサピーク海浜動物臨海研究所で約一カ月間の動物学実習を経験した後、ジョンズ・ホプキンス大学に入学して、動物学の研鑽を重ね、優秀な成績で卒業した。その後、1881年にアメリカを立ち、ヨーロッパ諸国を巡って、帰国する。帰国後は文部省御用掛を経て東京大学

---

理学部講師になり、1882年にはモース、ホイットマンといった御雇い外国人の跡を継ぎ、若干25歳にして日本人で最初の東京大学理学部動物学担当教授に就任した。後に理科大学長も務めた。箕作は動物分類学、動物発生学を専攻し、「日本動物学の父」、「実験動物学の父」と尊称されている。箕作の主な著書に『通俗動物新論』(1895)、『普通教育動物学教科書』(1900)などがある。

## 2-2 動物学における業績

東京大学において箕作が動物学担当の教授となる前は、御雇い外国人教師のモース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) が初めの二年間、残りの二年間をホイットマン (Charles Otis Whitman, 1842-1910) が受け持っていた。この二人の御雇い外国人教師が我が国に残した功績は計り知れないものがあるが、こと動物学に関しては「明治十四年以降我邦に於ける動物学の発達には、主として吾人日本人の手裏に在り」(箕作佳吉1907 p991) と箕作が豪語しているように、教授就任以降、自身が牽引していったのであった。箕作の動物学の業績については玉木存『動物学者 箕作佳吉とその時代-明治人は何を考えたか』に詳しいので、これを要約し、紹介することとする。(玉木存1998 pp.88-96)

箕作の動物学の研究は、大きく三つの時期に分けられる。

第一期 明治六年のアメリカ留学から十四年の帰国まで。

第二期 帰国翌年から明治二十年代の終わり頃まで。

第三期 明治三十年代から四十二年の死去まで。

第一期はアメリカ留学中の、ジョンズ・ホプキンス大学でブルックス教授のもとでの研究、イギリスのケンブリッジ大学バルフォア教授のもとでの研究である。当時、進化論が受容され、各方面でその応用研究が盛んな時期であり、箕作もまた軟体動物の斧足類の鰓の進化を解明し、ウサギの副腎の発生を証明した。これら研究は海外雑誌に発表され、箕作の名前は急速に広まり、動物学者の注目を集めることとなった。これら研究が、帰国後発生学にとりくむ契機となった。

続いて第二期は、カメの発生が主たる研究で、箕作のこの研究は、我が国では脊椎動物の発生についての最初のもので、当時は外国でも低調な研究領域であったので、彼の論文は発表と同時に一大センセーションを起こしたようである。

そして第三期は、ナマコの分類が中心で、箕作は動物学者たる者は、専門の何たるを問わず、一度は動物のある種群についての分類学的研究をなすべきだという主張を持っていた。この信念が後年、箕作のナマコ研究となって続いたのである。この間の、箕作の本格的な研究論文の発表はなかったものの、彼の死後に残された原稿をみたところ、ナマコ研究についてそのまま出版できるようになっていたものがあり、東大を卒業したばかりの大島廣(後の九州帝国大学教授)がその遺稿を纏め、『輻管足類ナマコの研究』(英文)を発表するに至った。この論文には、箕作が研究した69種の日本産のナマコについての記載があり、うち20種は新種であったという。このように箕作は病に倒れるまで動物学の研究に情熱を燃やし、多大な成果を残したのであった。箕作はまた、日本での海洋実験所の建設においても大きな役割を担った。

---

海洋生物の研究を進める上で欠かせないのは、その拠点となる海浜の研究施設であり、箕作は、留学を終えて帰国する前に、大西洋の海産物を調査し、最後の訪問地イタリアでは、ナポリ臨海実験所を訪ねていた。そこで創立者のアントン・ドールン所長の知遇を得、以後実験所の建設に関して種々の助言を仰ぐことになった。箕作はナポリ臨海実験所を見学する以前にもアメリカ、チュウサピーク湾の臨海実習会に参加した経験もあり、この時には既に我が国にも実験所を建設したいという思いが頭の中に去来していたことだろう。先に紹介した箕作の自負の言葉もあるように、我が国でスタートすることとなった動物学を欧米の亜流にしないことが肝要であると認識していた箕作であったため突破口を海洋生物の研究に求め、臨海実験所を設立したいと考えていた。その候補地として三崎、駿河湾の江ノ浦、瀬戸内海の鞆ノ津の三ヶ所を考えており、さらに臨海実験所の効用を、「第一 學術ノ進歩ヲ助クル事、第二 水産ノ事業ヲ助クル事、第三 学生及び地方学校教員ヲシテ実地ニ動物ノ研究ヲ為スヲ得ベカラシムル事、第四 博物館地方学校ノ為ニ水産動物ノ標本ヲ集ムルコトヲ得ベシ、第五 集ムル所ノ標本ハ外国ト交換シ」（鈴木克美 2003 p64）と、臨海実験所の必要性を力説していた。この活動が実り、日本最初の大学附属臨海実験所は、アメリカのウッズホール、イギリスのプリマスの両実験所に二年先がけて神奈川県三浦市の三崎にできた。箕作の目論見は当り、実験所が開設されると周辺の豊かな動物相についての研究が次々と現われ、それを基礎に我が国の動物学は独り立ちしはじめた。新種や稀種もあいついで採集され、三崎は欧米の動物学者の注目するところとなった。これもまた、箕作の動物学における大きな業績の一つであった。

### 2-3 博物館学意識

箕作佳吉の博物館学意識にみていく前に、先に触れておくべき意識がある。それは箕作佳吉の父である箕作秋坪（1826～1886）の博物館学意識である。箕作秋坪は、上野の教育博物館において矢田部良吉が館長職を退いた後、1879（明治12）年から1886年まで館長職にあり、館長補であった手島精一とともに博物館運営に携わっていた人物であった。箕作秋坪が館長職に就任してから「列品淘汰の訓令」が発せられるまでの7年余り間は、教育博物館が発展の一途を辿っていた時期でもあった。

その一つの動きとして、1877年に本館開館時から展示品の並べ方は変わっていなかったが、1879年12月になり博物標本の配列順序を変更した。これまで二階に展示されていた博物標本の配列は植物→動物→金石という順であったが、学術的に問題があるため金石→植物→動物という自然分類の体系に変更したのであった。また、同じく1879年の『教育博物館年報』「排列品ノ位地順序変更ノ件」の中で、ただ動物の骨格標本を並べるのではなく、剥製標本と一緒に並べ、鳥類に至ってはそれらに加え卵巣を並列するなど、一目でその動物たちの生まれつきの性質や習慣等を理解させるような「陳列法ハ高尚ナル動物學者ニハ或イハ適セサルモノノ如シト雖トモ普通學科ヲ修ムル者ニ在テハ蓋シ適當ノ排列法ト謂フヘキナリ」（国立科学博物館1977 p98）とあるように専門家向きの展示から一般者向けへの展示に変わっていった。そして、1883年においては展

---

示資料が多いことはかえって観覧者を混乱させるだけで、知的好奇心を促す展示とはならないという観点に立ち、一般者と専門家との展示を区別するという方針を打ち出した。この計画は一度に実施されなかったが、1886年5月制定の「東京教育博物館規則」の第二条で本館の展示を「動植物金石標品ハ之ヲニツニ区分シーハ参考室ニ陳列ス・・」(国立科学博物館1977 p99)と規定し、「普通観覧室」と「参考室」に二大別した。とはいえ、結局のところ、この計画は本館だけでは設計上不備が生じ、新館を含めたものとなり、この規定は博物標本を普通展示と参考展示に分けて展示することを成文化するに留まったものとなった。

しかし、これら先進的な活動が、実質、博物館学者として名前の通っている手島精一の指示によるところが大きかったことは言うまでもないが、箕作秋坪が館長職に在ったときに手島に呼応し、実施したものであったことは紛れもない事実である。

このような家庭環境下にあったため、博物館に対し関心を寄せたのは自然なことであつたらう。まず博物館関連の話で箕作が登場するのは、モースの著した『日本その日その日』第三巻の中の再来日したモースが東大を訪ねた時の話である。

当時、大学総理だった加藤をはじめ、菊地大麓、箕作佳吉、矢田部良吉、外山正一らが待ち構え、モースとの再会を喜んだ。その後、「動物学教授の箕作教授と一緒に古い実験室に入った。(中略)しばらく見物した上で、我々は往來を横切り、私の留守中に建てられた大きな二階建の建物へ行った。これは動物博物館なのである。帰国する前に行った私の最後の仕事は、二階建の建物の設計図を引くことだった。私の設計は徹底的に実現してある。私が最初につくった陳列箱と同じような新しい箱も沢山出来、そして大広間に入って、私の等身大の肖像が手際よく額に納められ、総理の肖像と相対した壁にかけてあるのを見た時、私は実にうれしく思ったことを告白せねばならぬ。(中略)この博物館は私が考えたものよりも、遙かによく出来上っていた。」(モース 1939)これは箕作がモース帰国後に建設された理学部の博物館(東京大学理学部博物場)へと案内した時のモースの印象である。動物学教師として理学部で教鞭をとったモースが、いったんアメリカに帰国し、再度来日したのは1882年のことで、この話は箕作の教授就任直後のことである。東京大学理学部博物場は、我が国ではじめての大学附属博物館であり、現在の東京都千代田区一橋に所在し、理学部本郷移転までの1880(明治13)年から1885年まで施設であった。つまり、開場からモース再来日まで、箕作が博物場に果たした役割は極限られたものであったものと考えられる。とはいえ、幾分閉鎖的な大学附属博物館であったが、その後、担当の教員を徐々に増やし、外部への公開に意欲を示すなど博物館活動を充実させようとした流れもあった。箕作自身、博物館担当の教員ではなかったが、授業で使用する等で活用し、日々の身近な存在であったことと思われる。

そして、箕作の博物館学意識が世に顕著な形として表出したのが「博物館ニ就キテ」(箕作佳吉 1899)である。箕作は、1887年にワシントンで開かれた海獣保護会議に我が国の代表として派遣され、翌年のイギリスのケンブリッジにおいて開かれた万国動物会議にも引き続き参加するなど、社会的活動に追われるようになっていた。この長期の欧米滞在期に、諸所の大学や博物館

等を観覧していた。この見聞を基礎として書いたのが当論文であった。その中で箕作は次の三項が博物館の目的であると定義付けている。

第一 国家ノ宝物ヲ貯蔵保管スルコト

第二 普通教育上参考トナルベキ陳列品ヲ備へ且ツ一般公衆ノ為メニ実物ニ依リテ有益ナル智識ヲ得兼テ高尚ナル快樂ヲ感ズルノ途ヲ設ケルコト

第三 高等學術ノ進歩ヲ計ルコト

第一項について、国家の宝物や得難き學術上貴重な標品は丁重に公立博物館に保存することを第一義とし、保存上差し支えなければ一般公衆に公開すべきとしている。また、その効果として美術の発達を促し、地理産業を広く知らしめ、国民の知識を深め、国民の愛国心を進めることが出来るものと考えている。当時、我が国でも「古社寺保存法」が成立し古器旧物に対する保存が叫ばれていたため、箕作自身も博物館をこれらの保存場所として捉えているものであった。

第二項に関しては、箕作はこの目的が「博物館設立ノ主眼ニシ世人ノ腦中ニ映ズル博物館トハ主トシテ此部分ノミヲ云フナリ」（箕作佳吉 1899 p317）と述べているように、箕作の中で社会教育こそ博物館機能の中で最も重要であるものとしている。また先に紹介した、父である箕作秋坪や手島精一らが教育博物館での構想と同様に、展示する資料（標本）が多いことはかえって観覧者を混乱させるだけで、知的好奇心を促す展示とはならず、一般者の「高尚ナル快樂」にはならないと考えている。そして「専門家ト公衆ト観ル可キ物品ヲ同一ニスルハ有害無益ナリ」（箕作佳吉 1899 p317）と強調し、「公衆ノ教育娛樂」に供する展示品は一品一品精選して展示すべきであるとしている。その具体的な方法として以下のような方法を示している。（箕作佳吉 1899 p318）

例ヘバ鳥ノ如キ剥製ノモノヲ棚上ニ置クラ以ツテ足レリトセズ其自然ニ生活スルノ状態ヲ示シ海外ニ住ム者ハ海岸ノ景色ヲ造リ出シテ（シカモ美術的ニ）鳥ノ標品ヲ或ハ岩上ニ止マラシメ或ハ巢ヲ営ムノ模様ヲ示シ而ノ雛鳥ノ標品ヲ活キタル如クニ造リテ其内ニ納メ又鴨ノ如キモノナレバ水邊ノ景色ヲ造リテ遊泳ノ状ヲ示シきつゝ、きノ如キモノナレバ樹木ノ幹共ニ之ヲ陳列シテ其樹皮下ニ虫ヲ求ムルノ様ヲ現ハシ燕ノ煙突中ニ巢ヲ営ム如キ屋根及煙突ノ一部分ヲモ出シテ人ノ注意ヲ惹ク様ニセザル可ラズ此等ノ如キハ唯僅々ニ三例ニシテ学科ノ標品ノ教ユ可キ普通ノ人ノ見テ以ツテ快樂ヲ感じ知ラズ識ラズノ間ニ其標品ノ教ユ可キ知識ヲ吸収スル様ニ意匠ヲ凝シテ造リ出サル可ラズ英国博物館ノ中央堂ニ備ヘタル標品（進化論ヲ説明スルモノ）及鳥類ノ美術的標品ノ如キ或ハニューヨーク博物館ノバイソン牛ノ一家族カ平原ニ遊ブノ状ヲ造リ出シタル標品ノ如キ如何ニ冷淡ナル人モ愉快ヲ感ズルナラン之ヲ旧式ノ博物館ノ陳列品ニ比スレバ活キタルト死シタルトノ差アリト言ハザル可ラズ

つまるところ、これは今日で言うところの「生態展示」を指し示している。そして、我が国で発表された生態展示についての最初の論及となったものである。

最後の第三項については、「其國其地方ノ動物界ヲ網羅シテ成ル可ク其蒐集ヲ完全ニシ之ニ就キ知識ヲ求ムル者ノ参考ニ供セザル可ラズ」（箕作佳吉 1899 p319）と述べているように、資料

を網羅的に収集する機能、そして専門教育機関としての学術研究機能も博物館の重要な目的の一つに位置付けている。

以上、箕作の博物館学意識の断片を概観してきたが、これら考え方は現在博物館の四大機能と大差なく、箕作が当時として余りにも斬新な博物館意識を持っていたかが伺えるものである。

また箕作は、先のような論文による博物館の普及活動もさることながら、大学内でもしきりに博物館の意義を説いていたようで、東大で同僚であった白井光太郎も「動物学科にては近頃箕作先生が博物館の必要に就き時々論ぜらるゝことがある」（白井光太郎1903 p10）と語っている。この話を聞いて育ったのが、教え子の谷津直秀と川村多実二であった。続いて、谷津の略歴及び専門の動物学の業績に触れ、氏の博物館学意識を見ていくこととする。

### 3 谷津直秀（1877～1947）

#### 3-1 略歴

谷津は1877（明治10）年10月9日、東京都赤坂に生まれた。1897年に東京帝国大学理科大学のちの理学部動物学科に入学し、箕作佳吉のもとでシャミセンガイの発生を研究する。1900年に動物学科を卒業する際に恩賜銀時計受領した。翌1901年には渡米し、コロンビア大学でヒモムシの発生を研究、Ph.D.の学位を得た。さらに1905から1907年までイタリアのナポリ臨海実験所でクシクラゲの研究に従事した。同年に帰国、動物学教室の講師、次いで助教授となった。しかし、箕作が退いた後、日本の動物学界で第一の有力者となった飯島魁の影響力が強くなり、観察記載を中心とした形態分類が主流となったため、大学内も谷津が実験動物学を提唱、導入に対し難色を示した。そのため、いったんは慶応大学医学部教授となり、1922年に亡くなった飯島魁のあとを継いで、母校の教授に戻り、東京大学動物学教室の七代教授に就任、1938年に退官した。



写真2 谷津直秀  
※谷津直秀1933aより転載

#### 3-2 動物学の業績

上野益三は『日本博物学史』の終章を、谷津は「一方において博物学の精神をよく理解したひとであった」（上野益三 1986 p160）と前置きした上で、「余の希望としては生物界の美を追究した古い博物学者或いは本草家の如き所謂古風のNaturalistの考えを復興したいと思ふ。」（谷津 1919）という谷津の言葉で締めくくっている。上野ははっきりと明言していないが、分類学の研究が深化するにつれて、研究対象の範囲が狭くなり仔細な論議に陥っている現状から、本来あるべき動植物研究の姿勢を問うているものと推察できる。その谷津の研究姿勢がよく分かるのが『動物分類表』である。この「動物分類表」は大正4年（1914）初版刊行以来版を重ねること6

---

回であり、動物学におけるベストセラーともいえるものであった。この『動物分類表』については福井由理子の「谷津直秀『動物分類表』(1914)について」に詳しいので、これを要約して紹介することとする。

前述したように谷津は「実験動物学」の導入者であり、従来の分類学中心の動物学を批判した人物でもあった。しかし、谷津自身は分類学者ではなく、分類学の研究をしたことがなかったにもかかわらず1914年に『動物分類表』を世に出した。『動物分類表』はこれまでの動物の形態及び発生を分類の順に従い詳述した典型的な伝統的分類学の教科書と異なっていた。その内容は自身の持つ豊富な知識を統合し、説明は極力抑えた動物の系統発生の経路を系統樹に示すなど先駆的な分類体系を有する「教科書」であった。この谷津の豊富な知識は学生時代に臨海研究所のある三崎付近の動物相をすべて明らかにしようと、ありとあらゆる種類の動物について勉強していた賜で、博識な谷津ならではの分類体系の構築であった。また、その狙いについて「実験動物学の提唱と連なることだが、動物学は「生きた動物学に就いて生活現象を研究する方に重きを於く」(谷津直秀1911)べきであり、そのために動物についての基礎知識としての分類学は、詳細でなくてもよいから、動物全般にわたって要点を短期間に習得する必要が生じた。さらに、その「分類学は動物の系統発生の過程を推論するものであることが肝要だった。」(谷津直秀1914)と述べている。つまり、分類学を否定し葬るのではなく、あくまでも「分類」は指標として、生きた動物をその生態と共に学ぶことが本来の学問である、これが谷津の動物学における学問的スタンスであった。

### 3-3 博物館学意識

谷津の博物館学意識に触れる前に、恩師箕作とのエピソード一つ紹介しておきたい。谷津は、略歴の通り1901年に渡米した。谷津が留学して三年余り経た頃、箕作が丁度セントルイス博覧会にて講演があり、帰途に谷津のいるニューヨークへ来る機会があった。来訪の報が箕作夫人から谷津へと伝わると谷津は「何か夢の如く先生の温容に接するの喜びいかばかりならん」(谷津直秀1910 p123)と語っている。箕作はその後も幾度か谷津を訪ね、一緒にブロンクス動物園に行き、ホナディー<sup>註1</sup>(Hornady)と会食するなどしたようである。この箕作の滞在時のことを谷津は「在米中否余の生涯中此二週間は最も愉快なりし出来事の一なりし」(谷津直秀1910 p124)と述べている。良好な師弟関係が実によく表れている一文である。しかし、皮肉にも谷津が1907年に帰国し、動物学教室の講師、次いで助教授となるも、箕作の死後、動物学教室は飯島魁の影響力が強くなり、谷津は慶応大学医学部教授となることとなった。

谷津は、上記の如く、箕作と当時、先進的な動物園として有名であったブロンクス動物園を巡るなど多くの博物館や動物園、水族館を巡っていたようで、1928年発行の『博物館研究』第1巻第7号で「私は特別に博物館に就いて研究したことはないが、唯だ子供の時から博物館が好きで、暇さへあれば行つて居たから感想を述べて見たいと思ふのである。」(谷津直秀 1928 p1)と自身で豪語するほどであった。谷津はとにかく博物館が好きであり、実際に筆者が調べただけで谷津



の博物館や動物園、水族館に関する論著は10編余りもあった。

まず、谷津の博物館に関する最初の論考は「博物館内の児童室」(谷津直秀 1908)である。短篇の雑録であるものの、アメリカ、ワシントンに所在するスミソニアン博物館内に設置された児童室の特徴を捉え、紹介したものであった。その紹介の仕方も「生物界の美を追求した古い博物学者」たる一面を覗かせたもので、「図書館は既に児童閲覧室の備各所にあり博物館にも児童室のあるべきは当然の事なり野外にて児童の自然に対する愛を養成すると同時に此の如き博物館にて常に接し得難き他面の審美観を幼き想像に富める脳裏に興ふるは好ましき事なるべし」(谷津直秀 1908 pp.51)と述べている。また当時、児童博物館は独立した館をもつChildren Museumと博物館内の一部に設置されたChildren Roomの二つを含んで総称しており、当論考は当時においてスミソニアン博物館では先進的な児童室が設けられていたことを知る貴重な論考である。またその特徴も「児童の巡覧して思はず自然を愛するの念を引き起す様なものを陳列す」、「見去り見来て子供ならず余も亦動物界の楽園に入りし感ありたり」(谷津直秀 1908 pp.50-51)と述べているように今日でいうディスカバリールームの如く形態を採っていたことが看取出来る。

次に、谷津の博物館に関する論考として1912年「活気ある博物館を設立すべし」がある。この論考は『新日本』という雑誌に収録され、この雑誌が大隈重信によって創刊されたことから分かる通り、国民文化の向上を目的とするもので、当論文の狙いも博物館を通しての文化の啓蒙を図ったものであった。その内容は、「鳥獣の古びたる不自然の態度を有せる剥製や濃厚色を有せるアルコールの中に、専門家と雖ども其生態を知るに苦む様なる魚や色の褪めたる蝶、脚を失へる昆虫、雑然たる介殻を陳列し一見物置然たる感想を誘起するものは過ぎ去れる世紀よりの遺物として考古学の標本として其価値を有する外、現世紀に於ては全く活気を失へる死したる博物館なり」(谷津直秀1912 p124)と述べる通り、谷津は厳しく旧態依然の博物館を批判したのであった。

そして、「米国立博物館の副館長にして特に博物館に就いて研究したる」(谷津直秀1912 p124) ジョージ・ブラウン・グード (George Brown Goodes) の言葉を引用し、「[過去の博物館を取り除き、骨董の墓場に変じて活きたる思潮の養成所とせざるべからず。]又曰く、「完成せる(即ち働きを終りたる)博物館は死せる博物館、死せる博物館は無用なる博物館なり」と然らば如何なるものを生きたる博物館と云ふか?」(谷津直秀1912 p124-125)と疑問提起をした上で、まだ認知度の低い博物館へ理解を深めてもらうために一般人にも理解しやすいよう博物館の歴史から紐解き説明を始めている。そして、教育的な博物館を理想(活きたる博物館)とし、生物学はもちろんのこと専門外である植物、人類学、天文地学などの展示に対しても具体的な例を挙げながらより良い展示の提示をおこなっている。そして注目すべきは当論考に掲載した図版であり、当時のアメリカ自然史博物館で最初の鳥類学キュレーターとなったチャップマン (Frank M. Chapman) が製作した生態展示とグードがスミソニアン博物館で実践した人類学標本を載せている。現在まで同じ写真が残っていることを鑑みれば、当図版が掲載された博物館に関する書籍を手元に持っていたと考えられる。いかに谷津の博物館に対する関心が高かったかが伺い知れる

---

貴重な文献となっている。

谷津はこの後も独自に博物館調査を続けていたようで1918年『趣味の動物』には、先のブロンクス動物園は勿論のことスイスのルチエルン氷河園内に設置された博物館も見学したことが載っている。その博物館では周辺で採集された考古資料や地域資料が展示されていたことに対し、「斯くアルプス山にて捕獲されたものを、悉く採集してあるから、学術上非常に有益である」（谷津直秀 1918 pp.162-163）と感想を述べ、谷津は我が国にも同じ条件下にあった富士山でも同様な施設の必要性を次の如く説いている。「富士登山の人は、多く富士を知らない。只登つて下る。之でも靈氣に接するではあらうが、得る所が少い。もし常設の富士館があつて、それに入ると、富士の模型、近傍の地質図、限界の達する所の山々の模型、岩石の標本、近傍の鳥獸、昆虫、植物の標本、植物帯の地図、数年来の氣象観測を備へてあつて、そこに充分博物學的の知識ある説明者が居ることになれば、下山の時に研究して莫大な知識を得ることは疑ひない。（中略）余の富士館建設の議も決して八咫靈峰の秀麗を害するの心配はない。之は確に大正の一事業であると思ふ。」（谷津直秀 1918 pp.163-164）というようにルチエルン氷河園内に設置された博物館を参考に独自の「富士館建設」の構想を抱いている。

その後、博物館事業促進会が発足すると直ぐさま評議員となり、1928年「東京博物館の必要」、  
「現代の博物館」、1933年「自然科学博物館に就いて（承前）」、「自然科学博物館に就いて」といった記事を『博物館研究』に投稿した。また、それら記事の中にも「今から三十七年位前に博物館の宣傳をした米国人でグードといふ人が、「出来上がつて何等改良の余地のない博物館は死んだ博物館である。死んだ博物館は無用の博物館である」と言つた。我々は博物館を生きた博物館にしなければならぬ。」（谷津直秀1928 p4）、「中央に於ては、大きな自然科学博物館と同時に技術産業の博物館を設立し、更に美術或は歴史を示すものを完備し、地方には形は小さくとも生きた即ち絶えず成長する処の元気ある博物館が出来て、学校と相並んで国民の教育に貢献する日の来ることを心から希望するものである。」（谷津直秀1928 p4）というように先述したグードの言葉を度々引用、咀嚼し、グードの博物館に対する高邁な理念を継承しながら恩師である箕作同様に博物館の普及活動に努めたのであった。

最後に、川村多実二の略歴及び専門の動物学の業績に触れ、氏の博物館学意識を見ていくこととする。

## 4 川村多実二（1883～1964）

### 4-1 略歴

岡山県津山町（現在の津山市）に父川村良治郎、母（福田）勸の次男として生まれる。川村が二歳のとき、現在の奈良県大和郡山市に移るも、十歳の年に父川村良治郎が新設の津山中学校の数学教諭として迎えられたため帰郷する。川村は二十歳まで生きられるかどうかといわれるほど生来病弱であったようであり、津山中学校に進学するも肋膜炎にかかって一年間休学するという苦い体験をした。その後、津山を離れ、京都市にある第三高等学校（京都大学教養学部の前身に

あたる旧制高等学校)に1903(明治36)年から三年間通いながら、洋画家の浅井忠の門を叩き絵画の本格的な指導を受け、習熟に努めた。その三年間、共に下宿生活を送ったのが、後に昭南島(現在のシンガポール)博物館長となり『南方文化施設の接収』を著した田中館秀三である。

1906(明治39)年に東京帝国大学動物学科に進み、教授であった同郷の箕作佳吉に加え、飯島魁、渡瀬庄三郎両教授に指導を受けることとなった。三高時代に写生に明け暮れた川村であったため、研究者自身で図を巧みにつくる研究者でなければ真相が明らかに出来ない複雑な構造群体のクダクラゲの研究を任せられた。そして、飯島教授の指導のもとクダクラゲの研究に取り組み見事な彩色図を伴い、卒業論文を仕上げたのであった。

しかし、1912(明治45)年に突如、東京を去り、京都帝国大学医学科大学に移って、生理学の探求をはじめようになった。在学中は特待生、卒業時に恩賜時計をもらうほど優秀であった川村の都落ちともいえるこの行動の経緯について博物学史の大家であり、川村と師弟関係にあった上野益三は『博物学者列伝』の中で尊敬していた箕作の死と、分類形態に終始している東大の現状によるものとした。そしてさらに「死んだ動物の標本ばかり研究して、どうして生きている動物の本質がわかるだろうか。そのような川村先生の言動が東大で異端視されるようになったのは、やむを得ないことであつたらう」(上野益三1991 p206)とも推察を加えている。川村は同大学の生理学研究室で助手として研究を始め、主任教授であった石川日出鶴丸博士が創設した医科大学附属の臨湖実験所の所員として淡水生物の研究に取り組むこととなった。もともと野外へ関心の高かった川村にとって淡水生物学に取り組むうち野外生物学により惹かれていくようになっていった。

1919(大正8)年京都帝国大学の理科大学は理学部と改称され、部内に動物学講座が設置された。当時助教授であった川村は、将来増設予定の動物学第二講座の担当教授候補者として在外研究を命ぜられ、欧米各大学で動物生態学、比較生理学の視察を行うことになった。その二年間の留学中にアメリカの各大学で野外授業の実際を目にした川村の研究志向は生理学から生態学へ移ることが決定的となった。その留学中での行動記録として川村が1920年『動物学雑誌』Vol32 No377、378、379に投稿した「巡米雑感」がある。川村は主としてアメリカの諸大学や研究機関を回り、先進的な生理学や生態学の研究に触れることができ、「予は予の数年来心潜に狙ひ来りし目標が、動物学進歩の大勢に於て、甚だしく方向を誤つて居なかつたことを僥倖として」(川村多実二 1920c p42)と報告の最後を締めくくっている。これは上野の推察の如く形態分類中心の東大から異端視されたことに対して、分類学から生態学へ研究志向を変えたことの正当性を暗に主張するものであろう。

1921(大正10)年、欧米留学から帰った川村は、京都帝国大学理学部の動物学第二講座担当の



写真3 川村多実二  
※上野益三1991より転載

---

教授に任ぜられ、欧米から学んだ野外実習を採り入れた授業カリキュラムを展開していった。これは日本ではじめての動物生態学の講義で、動物学界に新風を吹き込むこととなった。1931（昭和6）年には日本語で書かれた体系的な動物生態学の第一書とされる『動物生態学』を、1938年には『動物群集実験法』を著し、これらは生態学への誘いとして多くの学徒の啓発となったことであろう。

#### 4-2 動物園、水族館論

川村はそうした大学の研究や教育の傍ら、博物館や動物園、水族館といった社会教育施設に対しても意見を述べていった。これは欧米留学中に川村が大学のみならず、博物館や動物園、水族館にも努めて訪れていたことに起因する。博物館に関しては後述することとして川村が晩年までに書いた動物園、水族館に関する論文として、1926（大正15）年『自然科学』「動物園と水族館」、1936年『文藝春秋』「動物園の職能と様式」、1939年『博物館研究』「動物園の改善策」、1950年『宝塚昆虫館』「欧米の水族館」等が挙げられる。特にその初見ともなる「動物園と水族館」は動物園や水族館の起源を歴史的に紐解くとともに、その目的と効用までまとめている。またその末文を「動物園はもはや浅草花やしき式の観せ物ではなくて、通俗学術教育の必要機関であり、専門的研究の好き実験室であらねばならぬ」（川村多実二1926 p145）という言葉で締めくくっている通り、川村の動物園、水族館意識はモノそのものの研究に留まらない、まさにモノと人を結びつける研究であり、まさに博物館学意識とっていいものであった。

このような意識や積極的な取り組みもあり、川村は1934（昭和9）年には京都市の記念動物園長に抜擢され、京都大学の教授と兼任することとなった。その際には「動物の生態学的飼育管理を指導したり、展覧会を催す」（宮地伝三郎1965 p40）など任期間には手腕を振るったようであった。

また、今日我々の知る川村の有名な言葉として「現在のものを日本では動物園と呼んでいるが、Zoological Park, Zoological Gardenであるから、これは〈動物学園〉と訳さねばならぬ所であろう」（川村多実二1926 p105）がある。この言葉が我々の知るところとなったのは、佐々木時雄の『動物園の歴史』という博物館学史における名著の冒頭に引用されたからに他ならない。そして、それは川村が「元来はZoological Gardenだから、〈動物学園〉と訳すべきものを、学の一字を脱したのは、最初の翻訳者の失態である」（川村多実二1950）と書いた内容を佐々木が決め付けではないかと問題提起し、その語源について話が進められているものである（佐々木1975）。

確かに佐々木の研究の通り最初の訳者であるとされる福沢諭吉だけの問題ではないが、決めつけではなくむしろ正確に「動物学園」と訳して欲しかったという念がこの言葉に強く作用したものでしかない。あくまでも川村は「日本の動物園がいっこうに進歩しない」ことが「邦人の動物園の職能や教育効果に対する昔からの無理解に基づく」（川村多実二1950）とし、動物学を介さない見世物的な動物園に留まっている現状をそこに求め、もし正確に訳してくれば、本来動物園や水族館が目指すべき「動物学の進歩」と「国産動物の保存」といった目的が果たされていた

---

のではないかと考えていたに違いない。

#### 4-3 博物館学意識

そのような博物館学意識を持っていた川村であったため、博物館に関しても数々の意見を残している。その中でも「巡米雑感」は都合19ページにも及ぶ記録の中であり、川村の博物館学意識の萌芽が窺い知れる。川村はアメリカの多くの博物館や動物園を巡り、それらが多額の寄付によりは成り立ち、それによりキュレーターや助手などの職業形態が確立し、その研究者に見合う研究室の広さと充実した設備が与えられている現状を知った。また一方で、アメリカでは既に大学が動物生理学や生態学研究での中心となり、博物館では世界中から集められた標品を保存し、分類するなど形態分類研究中心となっていることを認識し、それぞれの研究の分業の有効性を見出していた。しかし、川村がその有効性を述べても一向に大学と博物館の研究の分業化は実現せず、学芸員の社会的地位は低いままとなっていた。この現状をみるにつけ、川村は晩年に「自然科学博物館の必要性-大学的研究と博物館的研究」<sup>註2</sup>(弟子の一人である筒井が『関西自然科学研究会誌』に掲載された川村の記事を『博物館研究』に転載したもの)を著している。川村はその中で再度進んだ欧米の現状を紹介し、東大に籍を置きながらも講師以上のポストを与えられなかった日本植物学の父と尊称される牧野富太郎博士を引き合いに出し<sup>註3</sup>、「博物学のうちで、実験を必要とする諸分科の研究は大学でやり、分類学ならびに応用方面の研究は博物館でやるというように両者分業」(川村多実二 1958 p17)の有効性を主張した。また「結局、わが国の政府も民衆も、この大学と博物館の分業ということを考えず、博物館の進歩を等閑した文教政治家の責任である」(川村多実二 1958 p19)と厳しい意見を投げかけている。さらに末文には博物学教育の不備化の打開策として博物館の増設の必要と野外における自然研究の重要性を力説している。

川村は「巡米雑感」の中でアメリカの博物館の先進的な展示にも触れ、「寸法を測り鱗を勘定して、外観を記載するを以て足れりとする分類学は、余程以前から人に飽かれて居るのである」(川村多実二 1920b p26)とし、「通俗教育として最上の効果があると認めらるる「生態陳列」」(川村多実二 1920b p26)の必要性を述べた。これは博物館が形態分類研究の中心となるべきとする立場と相反するように思われるが、それは川村が強く博物館を通俗教育施設と意識し、博物館の「研究」と「展示」という機能を整理して考えていたことに起因することと思われる。そして、分類展示が既にアメリカで飽きられていたこともあり、日本でもいずれその時が訪れることを予期してか、「巡米雑感」から稿を改めてNo380、381に「米国博物館の生態陳列」と題する先進的な展示手法の報告をしている。その冒頭で「會て欧米を旅行した先輩から外国の話聞いて、種々の動物を其棲息状態を示す配景の中に立たせてあると知つた時に、如何なる方法でそれが作られるのであるか知らんとする念切りであつた。」(川村多実二 1920d p32)と書いてあるように、その契機となった「先輩」とはまたニューヨークに滞在していたことのある箕作もしくは谷津に他ならなかったであろう。

これまで生態展示は先述の恩師である箕作佳吉や先輩にあたる谷津直秀などによって紹介され

---

てはいたが、都合12ページにも及ぶ、詳細な報告は戦前、戦後を通してみても類を見ないものであった。その中で川村は生態展示の歴史について詳しく言及し「然るに千八百六十年頃から九十年頃までの間に英國ブライントン市で熱心に鳥類を採集し且剥製標本を作りつゝあつたブースといふ人が、鳥の姿勢を正しく寫すことに苦心し、且つ幾分其鳥を射落した場所の状況を模して背景を添えることを試みた。これが今日の所謂「生態陳列」の濫觴である」(川村多実二 1920d p33) とし、その後もイギリスにおける生態展示の発達、さらにはアメリカ自然史博物館における生態展示の発達過程をまとめている。そして川村は生態展示の展示特徴を見事に捉え、我が国でも製作可能なよう、紹介している。以下、その製作方法を要約して紹介する。(川村多実二 1920d p36-37, 1920e p17-19)

今新一函の生態陳列を作らんと企画が起るとすると、第一に必要なものは設計である。而して此設計に際して先づ定めらるるものは「何某地方に棲む何某の動物」と云ふことである。其所で其動物に精通する専門の学者で、曾て躬から其ママ他に採集せし経験あるものが製作者に対して参考品を見せ乍ら彼の要求する所を説明して実行可否の意見を徴し、若し不都合なしとすれば、茲に雛形を造らしむ段取りとなる。(中略) 但し茲に製作者と云つたのは動物の剥製に対しては勿論樹木岩石其他材料の製作の知識を有し之が配置利用に経験のある製作主任者のことであるが、此者が背景の執筆及び全幅の美術的統一を担任すべき画家と協力して実物の五分の一位の雛形を作り玩具の如き動物を見立てそれで以て色の調子、材料の按配等あらゆる方面の見当をつける。(中略) 大体の設計が決定せられると、一隊の人員が採集用具運搬用材料を携へて候補地に向かつて出発する。(中略) 一行が候補地に到着すれば非常に忙しい目をする。即ち学者は直ちに動物の棲所、植物、水飲場、日常通路、糞便の形状、飛翔、飛躍、停立の姿勢、鬭争、遊戯、育児の挙動等あらゆる生態的觀察を初め、製作主任者、写真師、画工は或は木に攀じ岩角に臨み、時には危険を冒してまで周囲の光景色彩を写生し、又其一部分の精密なる写生を集める。採集者人夫は是等の人々の指揮により動物を射殺捕獲し、樹幹を伐り、草苔等を成る可く傷けぬ様に掘り取り、岩石は色彩形状の見本を作り、時には其一部の雌型に取る。凡て其辺にあるものを陳列函中に利用し得るものは成る可く自然の状態を傷つけぬ様に、且つ余分を見積もつて採取し、之を後に組立てる時に差し支へぬ様に番号記号を附した上で荷造りをする。(中略) 右の如くにして集めた材料を齎らして館に帰り来れば、茲にいよいよ組立を初める。第一に着手すべきは勿論背景であつて、之が出来上ると、前方に岩石樹幹を配し、其間に工場で準備して居た木の葉や草を用ひて細末を完成し、動物剥製を適當の位置に配し、前面の硝子をはめて、茲に初めて完成といふことになるのである。

このように、川村は生態展示の展示特徴ともいえる「数箇所の實景材料を用ひて、人工の臭みを残さぬまでに巧に組み合わせた、理想上の景観」(川村多実二1920d p34) を造り出すために必要な再現する候補地の綿密な調査、材料の収集に、背景画や剥製、展示ケースの製作法など自身が知り得たことを事細かくまとめている。当文献が戦後刊行された木場一夫の『新しい博物館』

---

(木場一夫1949)の中でそっくりそのまま引用されているが如く、その後の博物館学において基本文献の一つであったことは言うまでもないことである。また、冒頭で上野益三の「師授伝統」の文を引用し、紹介したように川村もまた優秀な後進を育てた人物でもあった。

川村は専門である生態学の後進は勿論のこと博物学史の大家の上野益三を初めとして筒井嘉隆、梅棹忠夫等を育てた。(筒井嘉隆1978) 留学時に理想的なアメリカの博物館の現状を見るにつけ「陽光のさし込んだ明るい室々に美しい動植物の陳列を見る毎に、遙に上野の森陰の、あの暗い、骨董品が到着する度に剥製が一々宛倉庫の中に追ひ込まれる博物館を想ひ出して、何となく我影が薄い様に感じた」(川村多実二1920c p41-42)と、当時の我が国の未成熟な博物館の現状を我が身の如く忸怩たる思いで吐露した川村であったが、その弟子の一人である筒井嘉隆により大阪市立自然科学博物館(後の大阪市立自然史博物館)が、そして梅棹忠夫によって国立民族学博物館の創設がなされた<sup>註4</sup>。

## 5 まとめ

上記の如く、箕作、谷津、川村の略歴及び専門の動物学の業績に触れ、順にその博物館学意識に触れてきた。三氏が我が国の博物館学に遺した足跡は計り知れないものがあり、本稿でもかなりの紙幅を要した生態展示論は三氏の業績抜きでは語れないものがある。また、三氏に共通して言えることだが、いずれも動物学を極めた人物であり、またそこで留まらなかった人物でもあった。自身の専門から動物学の進歩を望み、研究施設として博物館の有効性を見出す一方で、専門という殻を破り、一教育者としてモノと人を結びつける社会教育の場として博物館の意義を訴え続けた。これら業績は、現在の博物館学と照らし合わせても遜色なく、まずもってこの三氏の業績を注目すべきであろう。今後は、稿を改めて、同時代に生き、同じく博物館学意識を持っていた植物学者に注目し、彼等の業績を纏めていくこととしたい。

最後に、筆者はあくまでも三氏の遺した文献にあたり、その知見を整理したに過ぎず、特に独創的な考察などなく、大所高所からみることが出来たわけでもない。しかし、このような博物館学人物史は博物館学の体系化を考えた場合、「歴史の空白を埋める道標」として遅かれ早かれ纏めていかなければならないものであることには違いない。また、いつの時代も博物館は国策や社会情勢に強く影響を受けるものであるから、現在置かれている博物館の状況と当時の状況が近似することもある。つまり博物館学意識をもった人物たちの足跡を辿れば自ずとその解決の糸口、将来への指針が見えてくることもあるだろう。また反対に、当時の先学者たちの博物館学意識と現在の博物館学とを比較し、その学問的な進展の遅さに気付かされるなど、我々が反省の念を抱く材料ともなりえよう。

本稿がその博物館学人物史の土台作りの一助となれば幸いであり、大方の御批判と御指導を仰ぎたい。

---

## 【註】

- 註1 ホナディーはニューヨークのワード標本製作所で標本製作を学び、ブロンクス動物園長を勤めた人物であった。また、2年間全世界の採集旅行をした後、1880年にアメリカ自然史博物館のために「オラングウタン」の一群が樹上に活躍する有様の生態展示を作った人物でもある。
- 註2 筒井義隆が『関西自然科学研究会誌』第10号（1957.5）に掲載された「関西自然科学研究会の使命」という川村の記事を『博物館研究』第31巻第1号に転載した。
- 註3 川村は顕花植物の分類を得意とした牧野博士ではあったが発生・解剖・生理・生態・遺伝等といったことに精通しておらず、分類学の講義を任せるにしても他にシダ類・菌類・藻類・細菌類・粘菌類まで幅広い知識を必要とするため牧野博士では不十分であり、わずかに数人の教授、助教授の席を提供しなかった東大の措置の妥当性を述べている。しかし、分業化された博物館であれば顕花植物だけの研究に専念する牧野博士を喜んで受け入れ、相応の席を用意することが出来たのではないかと考えていた。
- 註4 1978年『町人学者の博物誌』「対談 動物学と博物館 梅棹忠夫・筒居嘉隆」の中で、二人が川村多実二から指導を受けていたことを語っている。

## 【引用参考文献】

- 伊藤寿郎 1991「刊行にあたって」『博物館基本文献集』別巻 大空社
- 岩川友太郎 1910「教育家としての箕作博士」『動物学雑誌』22巻 256号 p.p.92-111
- 上野益三 1986『日本博物学史 補訂』平凡社
- 上野益三 1988「川村多実二」『近代日本生物学者小伝』平河出版社 pp.379-387
- 上野益三 1991『博物学者列伝』八坂書房
- E.S.モース 石川欣一訳 1939『日本その日その日』創元社
- 川村多実二 1920a「巡米雑感」『動物学雑誌』Vol32 No377 pp.20-27
- 川村多実二 1920b「巡米雑感」『動物学雑誌』Vol32 No378 pp.26-31
- 川村多実二 1920c「巡米雑感」『動物学雑誌』Vol32 No379 pp.37-42
- 川村多実二 1920d「米国博物館の生態陳列」『動物学雑誌』Vol32 No380 pp.32-37
- 川村多実二 1920e「米国博物館の生態陳列」『動物学雑誌』Vol32 No381 pp.17-22
- 川村多実二 1926「動物園と水族館」『自然科学』創刊号 pp.103-145
- 川村多実二 1931『岩波講座生物学 3 - 1 動物生態学』岩波書店
- 川村多実二 1936「動物園の職能と様式」『文芸春秋』3月号
- 川村多実二 1938『生物学実験法講座 動物群集実験法』第13巻 2 建文館
- 川村多実二 1939「動物園の改善策」『博物館研究』Vol13 No1
- 川村多実二 1950「欧米の動物園と水族館」『宝塚昆虫館報』68号
- 川村多実二 1958「自然科学博物館の必要性 - 大学の研究と博物館的研究」『博物館研究』Vol31



No1

- 磯野直秀 1988「箕作佳吉」『近代日本生物学者小伝』平河出版社 pp.100-105
- 君塚仁彦 1991「病床の傍らで聞いたこと－伊藤寿郎先生と『博物館基本文献集』－」『博物館基本文献集』別巻 大空社
- 国立科学博物館編 1977『国立科学博物館百年史』
- 木場一夫 1949『新しい博物館』pp.61-76
- 佐々木時雄 1975『動物園の歴史』平凡社 pp.10-15
- 椎名仙卓 1978「明治後半期に於ける博物館設置・運営論－田中芳男・箕作佳吉・棚橋源太郎－」『博物館研究』Vol.13 No.7 通巻123号 pp.3-9
- 白井光太郎 1903『植物博物館及植物園の話』玩古齋蔵版
- 鈴木克美 2003『水族館』法政大学出版局
- 竹脇潔 1988「谷津直秀」『近代日本生物学者小伝』平河出版社 pp.275-279
- 玉木存 1998『動物学者箕作佳吉とその時代：明治人は何を考えたか』三一書房
- 筒井嘉隆 1978『町人学者の博物誌』河出書房新社
- 邊見端「明治期“博物館学”の面目－坪井正五郎博士の業績－」『博物館学雑誌』第11巻 第2号 1986 p.p20-29
- 福井由理子 2001「谷津直秀『動物分類表』（1914）について」『生物学史研究』No.68
- 箕作佳吉 1895『通俗動物新論』学海指針社
- 箕作佳吉 1899「博物館に就て」『東洋学藝雑誌』第16巻 第215号 pp.315-320
- 箕作佳吉 1900『普通教育動物学教科書』開成館
- 箕作佳吉 1907「博物学」『開国五十年史』上巻 大隈重信編
- 宮地伝三郎 1965「川村多実二先生をしのんで」『日本生態学会誌』Vol15 No1 pp.39-40
- 谷津直秀 1908「博物館内の児童室」『動物学雑誌』第20巻 第237号 pp.50-51
- 谷津直秀 1908「動物園に関しての一考案」『動物学雑誌』20巻 242号 p.557
- 谷津直秀 1910「ニューヨークに於ける箕作博士」『動物学雑誌』第256号 pp.123-124
- 谷津直秀 1911「生物学の今昔」『新日本』第1巻 第3号 pp.106-108
- 谷津直秀 1912「活気ある博物館を設立すべし」『新日本』2巻 2号 pp.124-128
- 谷津直秀 1914『動物分類表』丸善
- 谷津直秀 1918『趣味の動物』実業之日本社
- 谷津直秀 1919『生物学講義』裳華房
- 谷津直秀 1928「東京博物館の必要」『博物館研究』第1巻 第5号 pp.3-4
- 谷津直秀 1928「現代の博物館」『博物館研究』第1巻 第7号 pp.1-4
- 谷津直秀 1929「現代の博物館」『農村教育研究』第2巻 第1号 pp.14-15
- 谷津直秀 1933a「自然科学博物館に就いて」『博物館研究』第6巻 第10号 pp.3-4
- 谷津直秀 1933b「自然科学博物館に就いて（承前）」『博物館研究』第6巻 第12号 pp.1-3